

年中行事と祭り

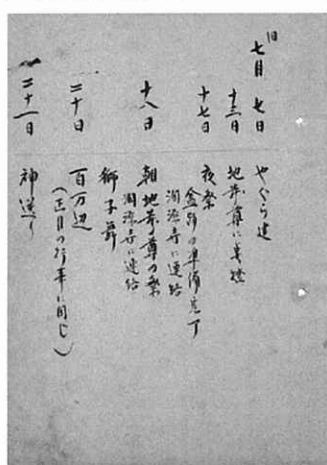
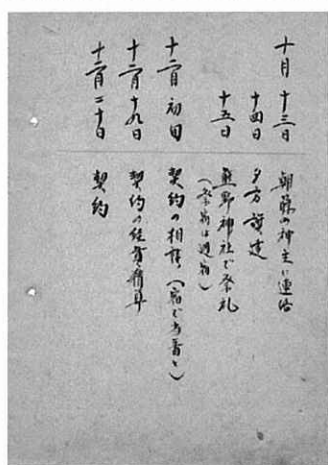
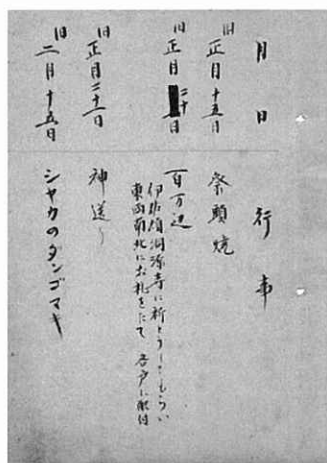
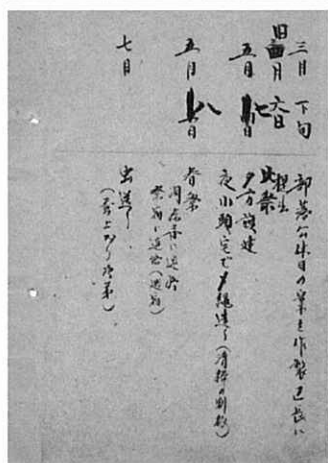
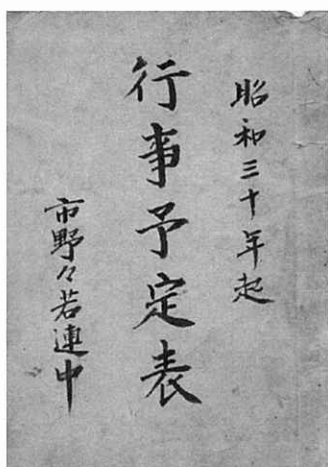
村の年中行事

私たちの生活の中には毎年一定の暦日に一定の様式に従って、家・集落などの集団が行う行事がある。これを年中行事と呼んでいる。市野々・下叶水には、他地区に比較して多くの珍しい年中行事が伝えられていた。
(市野々・下叶水の年中行事については、本書の巻末に表にして載せています)

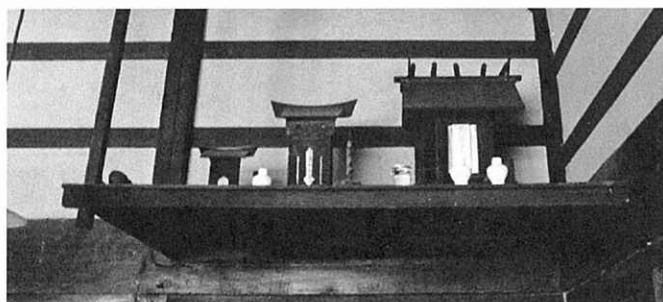
◆ 神送り

正月には正月の神々が、お盆にはお盆の神々が村に降りてくる。村の繁栄と人々の無病息災を守ってくれる神々を迎え、そして送り出すことは村人の義務であった。

一月十五日の小正月が過ぎて二十日にだんごおろしを終え、翌二十一日は神送りの日である。夜、村の全戸が参加し、小頭の吹くホラ貝とともに、提灯をさげた村人たち



市野々若連中による年間の行事予定表(昭和30年)



多くの神々を祀る神棚



神送り、虫送りで吹くホラ貝

が「正月の神送る」と大声で唱えながら、市野々は向原、下叶水は明神の村はずれまで神をお送りした。また、お盆の神送りは七月二十一日、正月の時と同じように、村の上から村はずれまで神をお送りしたものである。神と人、日常と非日常、つまりハレとケのけじめがくらしの中に求められていたが、毎月、何らかの形で村人は神々と親しくつきあっていた。

◆ 虫送り

虫送りは農作物に害をもたらす虫を追い払うための呪術的な行事で、市野々では七月の「蚕上がり」のころに、若連中によって行なわれた。夜、ヤナギの枝に「虫送り」の札を下げ、提灯を持って村の上からホラ貝を吹きながら、「虫送るわー」と唱えて歩く。神送りと同じように向原の村はずれまで虫を送り出した。この日、仕事は休みで、約束を守らずに働いた者は、罰として酒一升と鯀一束を差し出さねばならなかった。下叶水でもほぼ同様のやり方で行われ、村はずれの明神まで送った。ただしホラ貝は、下叶水では単に「貝」と呼んでいた。貝といっても貝殻ではなく、桐の木をくり抜いて作った長さ三十五センチほどのラッパのようなものである(市野々の「ホラ貝」も木製)。「貝」は各家の玄関に常備され、祭りや行事に限らず、「火事だ」「税務署が来た」(密造酒取り締り)など、緊急事態を告げる道具としても使われたものだった。

◆ 百万遍

百万遍とは、阿弥陀の名号を百万回唱えることで、本来は多くの仏僧が集まって一つの大きな数珠を練りまわしながらみんなで念仏を唱える法会で、百万遍念仏ともいわれる。この習俗は各地に多く残されているが、市野々では小正月の一月二十日、村の人たちが寺に集まり、大きな数珠を全員で回しながら願いを唱えた。また、飛泉寺の兼務住職に祈禱してもらった後、御札をいただいて各家々に配る。そして、村に疫病、災難が入り込まないよう、桜峠や西、綱木峠、向原など村はずれに御札を立てた。七月二十日(旧暦)の夏盆にも行われたが、昭和のなかば頃から、だんだん行われなくなった。

下叶水では七月十六日、済広寺で

◆ 市野々の祭り

◆ 春祭り

春の祭りは五月八日で、この日は村内すべて休業とした。前日七日は夜祭りとなっており、夕方に奉納旗を立て、夜になると小頭宅で鳥居に

百万遍が行われた。百万遍は一戸から一人というのではなく、何人でも参加できた。下叶水には単独の「火祭り」がなかったかわりに、火事や災難などがあつた時などもその都度、百万遍が行われた。



飛泉寺に保管の百万遍の数珠
(大正四年の文字が見える)

下げるしめ縄作りや清掃の割り振りをした。

春は仏さまの祭りとされ、観音さま、お不動さま、お薬師さまが主役となる。祭りに際しては飛泉寺の兼務住職である伊佐領の洞源寺(昭和



春祭りの前日、鳥居のしめ縄作り (昭和47年)



春祭りの日の観音さま (平成3年)



秋祭りの日の熊野神社 (昭和48年)

◆ 秋祭り

三十年当時) にお願ひし、観音さまとお不動さまを一年毎に拜んでもらい、祭宿は廻り当番(廻宿)となった。祭りでは餅を搗き、それをお供えして三つの仏さまをお参りした。横川対岸にあるお薬師さまは、正月のお参りは雪が深くて行けず、金毘羅さまと合わせて熊野神社から参拝する習わしになっていた。

秋祭りは十月十五日、市野々の鎮守である熊野神社と金毘羅さまの祭りである。

祭り前日の夕方、村の氏子たちが

◆ 火祭り

市野々では旧暦三月六日を「火祭りの日」と決め、火の供養というものを長い間行ってきた。この祭りの由来は次のようなものである。

幕末の慶応二年(一八六六)三月六日のこと、宿場として栄え賑わう市野々に火災が起こった。突然の火事によって、全戸数二十二戸のうち、

加藤与右工門、加藤伝八、加藤伝吉、伊藤四郎右工門、加藤与兵衛宅の五戸と土蔵や小屋、物置などを合わせて十一戸の家屋が灰燼(かいじん)に帰した。燃え盛る炎に市野々の人々は恐れおののいた。

村の人たちは再びこのような災禍が起きるのを防ぐために、三月六日を忘れず、火の供養をしようと火祭りの日に決めたのである。

火祭りは、熊野神社と伊藤家(屋号四郎右工門)の屋敷神である神明さまを祭神とし、そこを交互に宿元として神事を執り行った。三月六日早朝、身を淨めた廻り当番は手桶を持って各家を訪れ、朝一番に焚いた火を水の入った飯茶碗に入れ、火



お薬師さまの祠 (昭和48年)



下叶水の盆踊り (昭和30年代)

三 下叶水の祭り

の消えたものを桶に納め、家族数に応じた賽銭を集めて火災防止の祈禱をした。この祈禱は熊野神社は朝篠の舟山神職、伊藤家では黒沢の松林法印まで営まれた。

昭和三十年代になって両神社の合祀がなされた後は、火祭りの神事は熊野神社で行われたが、近年では公民館行事に組み入れられるようになっていった。

◆ 山の神祭り

下叶水では市野々のような「山の神講」はなかったが、山の神の祭りは集落にとって大切な行事のひとつだった。旧暦の三月十七日、山の神の祠に集まり、同行した神主が拝んだ後、各人が持ち寄った銚子一本ずつの酒を酌み交わした。参加者は酒のほかにカド（鯨）を一匹ずつ持参し、串刺しにして杉っ葉を燃やしてそれを焼いて食べた。

鎮守さま（石動神社）のお祭りとは違い、全戸からの出席が義務というのではなく、主に山仕事に従事していた人々によって行われていたようだ。

◆ 春祭り

新暦の四月十六日、神明さまのお祭りは、仕事を休んで各家で餅を搗いた。一戸から一人、やはり銚子一



石動神社前の大黒さまの祠

本と何かツマミを持ち寄り、拜んだ後に酒飲みとなった。まだ雪が残っていて、お堂でやったものだった。

春には、大黒さまとお稲荷さまも祭ったという。大黒さまの祠は石動神社のところにあり、お稲荷さまは神社への上り口の脇に祠があった。お稲荷さまに行くときは、女子衆がイナリ（寿司）など作って集まった。養蚕をしていた家の女性たちがカイコのようなたわらを編んで集っていたことから、養蚕に関係のある祭りだったのではないとも言われている。

◆ 盆踊り

下叶水の盆踊りはこの辺では珍しく、旧暦七月十五日と十八日の二回行われていた。十五日は済広寺の本尊である阿弥陀さまの命日で、十八日が太宮さまの命日だったため、それぞれの日に行ったのだという。場所はどちらも済広寺の前の庭。

内容は同じである。七月の七日、「灯籠立て」といって、木で作って色紙を貼った飾り灯籠のようなものに、ススキと萩を飾って立てた。灯籠立てになると、「お盆が来るなあ」とワクワクしてきたものだった。

◆ 秋祭り

秋祭りは、村の鎮守さまである石動神社と愛宕さまのお祭り、石動神社の上り口に奉納旗を二本立てた。十月十七日に夜祭り、十八日が本祭りだった。夜祭りの日は、昼間の仕事を終えてから神社に集まった。車が普及する以前は、宮司（朝篠の神主）の泊まる宿の家が年によって決まっていた、その家の人がお神酒一升と塩、ネギ、大根を供えた。

夜祭りへの参加は、日の悪い家（不幸のあった家）以外は義務だったが、本祭りは、行きたい人が自由に行って手を合わせた。本祭りの日は仕事が終わった。当たり日（祭礼の日）という餅を搗くのが常だった。餅は、山村の何よりのご馳走だった。